

# Emergency Watch



## 神戸こども初期急病センター



2013年10月受診者数：1670人

### 訴え

1. 咳	: 777人 ( 235人)
2. 発熱	: 773人 ( 514人)
3. 鼻汁	: 539人 ( 15人)
4. 嘔吐	: 354人 ( 168人)
5. 呼吸困難	: 265人 ( 202人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

### 疾患頻度

1. 急性上気道炎・咽頭炎	: 481人
2. 感染性胃腸炎	: 273人
3. 気管支喘息・喘息性気管支炎	: 267人
4. じんま疹	: 103人
5. 気管支炎・肺炎	: 89人

## 今月のワンポイント！

あつというまに11月に入り、日増しに寒さが加わって参りました。今年もあと2ヶ月となります。

10月の神戸こども初期急病センターへの受診患者さんの数は、1670人と9月に比べ50人ほど減少していました。疾患別頻度は、急性上気道炎・咽頭炎が最も多く、次いで気管支喘息・喘息性気管支炎、感染性胃腸炎の順でした。

さて、もうすでに地域によってはインフルエンザの集団発生が見られ始めています。今回は、毎年世界中で流行がみられているインフルエンザについて、お話します。インフルエンザは、インフルエンザウイルスを病原体とする急性の呼吸器感染症です。インフルエンザウイルスに感染すると1～5日間の潜伏期間を経て、突然に発熱（38℃以上の高熱）、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などが出現し、鼻水・咳などの呼吸器症状がこれに続きます。通常は1週間前後の経過で軽快しますが、「かぜ」と比べて全身症状が強いのが特徴です。主な感染経路はくしゃみ、咳、会話等で口から発する飛沫による飛沫感染であり、他に接触感染もあるといわれています。

感染対策としては、飛沫感染対策としての咳エチケット、接触感染対策としての手洗い等の手指衛生が重要です。インフルエンザでは、たとえ感染者であっても、全く症状のない場合や、かぜ様症状のみでインフルエンザウイルスに感染していることを本人も周囲も気が付かない軽症な例も少なくないため、特にヒト-ヒト間の距離が短く、濃厚な接触機会の多い学校、幼稚園、保育園等の小児の集団生活施設においては可能である場合は職員も含めて全員が咳エチケット、手指衛生を実行するべきです。

また、インフルエンザの予防に効果が期待できるのがワクチンの接種です。特に、小児ではまれに急性脳症や肺炎を併発するなど、重症になることがあります。インフルエンザワクチンによる予防は、そんな合併症の重症化を防ぐと言われていています。インフルエンザワクチンは、13歳未満は原則として2～4週間の間隔をおいて2回接種します。13歳以降は1回、または2回となっています。効果があらわれるのはおよそ2週間後からでその後約5ヶ月間持続するといわれていますので、流行シーズンを迎える11月中の接種をお勧めします。特に小さい赤ちゃん、兄弟がおられる家庭では、大人も含め予防接種をできるだけ受けて予防しましょう。それから、普段から栄養と十分な睡眠をとり、インフルエンザウイルスの空気中での活動や感染を抑えるために、加湿器等で室内の湿度を50～60%に保つと良いでしょう。

